

PDA で変わる選書の未来

— 千葉大学・お茶の水女子大学・横浜国立大学三大学連携プロジェクトの取組み —

立石 亜紀子*1, 餌取 直子*2, 庄司 三千子*3

千葉大学・お茶の水女子大学・横浜国立大学の三大学連携プロジェクトの一環として、2015 年 4 月～9 月にかけて実施中の電子書籍 PDA 実験について報告する。三大学は規模や大学の特徴が異なり、選書方針、電子書籍の収集状況、蔵書構築における課題などにも違いがみられる。一方で、和書の電子書籍購入を促進したいという共通の課題があり、丸善（株）の協力のもと、連携事業として実験に取り組むことになった。2015 年 5 月末時点で、電子書籍に対するニーズの把握、利用促進効果などの成果が得られた。今後の課題としては、購読決定の条件について、提供側と図書館側の両者が納得できる適切な条件の設定が挙げられた。

キーワード：電子書籍、PDA、利用者主導型購入方式、選書、大学連携、蔵書構築、広報

1. はじめに

千葉大学・お茶の水女子大学・横浜国立大学の三大学連携は、2014 年 3 月 25 日に三大学の学長が図書館間連携の申し合わせを取りまとめてスタートした。「各大学の附属図書館の教育・研究支援機能の充実及び高度化に向け、単独大学では不可能な課題解決手法の開発・実施に取り組む」¹⁾ことを目的とし、シェアード・プリントやアクティブラーニングの推進等 7 つの課題について、大学の枠を超えたワーキング・グループの形式で取り組んでいる²⁾。

課題の 1 つとして、2014 年から電子資料の共同購入について検討することになった。電子ジャーナルについては JUSTICE コンソーシアム等の既存の取り組みがあるため、電子書籍の購入、なかでも導入が進んでいない和書の電子書籍の購入にターゲットを絞ることになった。後述するが、国外では PDA (Patron-Driven Acquisitions: 利用者主導型購入方式) による電子書籍購入が注目を集めている。国内ではまだ事例がなく、出版者や代理店の協力を得るには、一大学では交渉が難しいため、三大学連携プロジェクトの一環として和書電子書籍の PDA 実験プロジェクトを立ち上げることにした。

本稿の構成は次の通りである。三大学は規模や大学の特徴が異なるので、はじめに 2 章で各々の選書方針、電子書籍の収集状況、蔵書構築方針における課題などについて述べる。3 章では、共通部分として選書をめぐる課題から、PDA 実験に至った経緯と、PDA 実験の概要を説明する。

さらに 4 章では、2015 年 5 月末時点での三大学各々の実験の途中経過を報告する。最後に 5 章で PDA 実験のメリットと課題をまとめ、電子書籍と選書をめぐる今後の展望について簡単に触れる。

2. 三大学での電子書籍の収集状況と選書をめぐる課題

2.1 お茶の水女子大学の状況

2.1.1 蔵書構築と選書方針

お茶の水女子大学附属図書館は、東京都文京区大塚のキャンパス内に 3 学部 1 研究科を有する国立女子大学の附属図書館である。小規模ながら、文系と理系の両方を有し、奉仕対象者は約 5,000 人である。

全学の蔵書冊数は約 71 万冊で、和書：洋書の割合は 2：1 で和書が多い。また、全学の蔵書のうち約 30 万冊は、研究室図書室と呼ばれる各学科等の図書室に所蔵している。他学科の学生も研究室図書室を利用できるが、「開室時間が短く利用しにくい」「配架方式が室ごとに異なるため探しにくい」などの課題を抱えている。

収書方針は「お茶の水女子大学附属図書館資料収集方針」（附属図書館運営委員会承認）を設けているが、運用方針を大枠で示したもので外部に公開はしていない。附属図書館に置く学生用図書の選定は、教職員による見計らい選書が主で、そのほか、教職員によるオンラインの個別リクエストや、LiSA（図書館学生アシスタント）による見計らい選書がある。

2.1.2 電子書籍の購入状況

PDA 実験開始以前の 2015 年 3 月までの電子書籍の購読実績は約 2 万タイトルで、パッケージ契約で購入している洋書の電子書籍が多数を占め、和書の電子書籍は約 950 タイトルに留まる。

電子書籍購入費としての特別な予算枠を設けていないこともあり、日常的には電子書籍の選書はしておらず、年度末に資料費の節約分等を利活用して購入するケースが多い。2014 年度末は、ある海外出版社の購読済みの分野別

*1 たていし あきこ 横浜国立大学 図書館・情報部図書館情報課

*2 えとり なおこ お茶の水女子大学 図書・情報課

*3 しょうじ みちこ 千葉大学 附属図書館学術コンテンツ課

〒240-8501 神奈川県横浜市保土ヶ谷区常盤台 79-6 横浜国立大学附属図書館

Tel. 045-339-3209

E-Mail: tateishi.akiko@ynu.ac.jp (原稿受領 2015.7.16)

パッケージの利用実績と、非購読タイトルへのアクセス拒否件数（アクセス権がないために拒否された件数）を参考に、予算枠に合致する洋書のパッケージを選定した。パッケージの契約にはまとまった金額が必要だが、収録タイトル数で割ったときの単価は割安感がある上に、利用実績やアクセス拒否件数の統計から購入後の利用の有無が判断できるため、年度末という慌ただしい時期は特にパッケージの方が導入しやすい。和書の電子書籍の場合、現状ではタイトル毎の選書が必要となること、和書の電子書籍は冊子体よりも高額で洋書の電子書籍と比べて割高に感じられることから、選書に充てる時間や費用対効果を考えると積極的には選定しにくい状況である。

2.1.3 電子書籍の利用状況と課題

これまで電子書籍の利用促進活動は特段してこなかったが、コンピューターや数学の分野の洋書の電子書籍は、継続的に一定以上の利用実績があり、教員や大学院生以上の研究者が利用していると推測される。一方、主に学部生の利用を見込んで購入した和書の電子書籍は、よく利用されているとは言えない状況である。利用が少ない理由は、内容面の要因（図書館が選書した電子書籍が学生のニーズに合致していない）、利用面の要因（学生の学習行動に電子書籍が浸透していない、利用方法が分からない、そもそも電子書籍があることに気付いていない）などが考えられる。電子書籍の場合、冊子体のように書架をブラウジングすることによる偶然の発見がなく、蔵書検索が主な利用ルートになっている。電子書籍の利用の少なさは、特段の広報をしない場合、冊子体と比較したときの見つかりにくさにもあると考えられる。学生が大量の書籍をキャスター付きのスキーバッグで持ち歩いている姿を見て、電子書籍のメリットを生かした学修支援サービスへの切り替えが必要だと感じるが、きっかけが掴めずにいたというのが正直なところである。

2.2 横浜国立大学の状況

2.2.1 蔵書構築と選書方針

横浜国立大学附属図書館は奉仕対象者数約 11,000 人（2015 年 5 月 1 日現在）³⁾、4 学部 5 研究科・研究院で構成される中規模国立大学の図書館としてサービス提供している。蔵書冊数は約 137 万冊（2014 年 4 月 1 日現在）で、6 : 4 の割合で和書が多い⁴⁾。近年は書架の狭隘化が進んでいるため、重複図書の除籍を進めており、蔵書冊数は若干ではあるが減少の傾向にある。

収集方針は存在するが、非常に簡単な大枠を示したもので、外部に公開はしていない。「多くの大学図書館では図書館の使命とともに、収書に関する理念を何処かに示している。しかし、実態としては、体系的に成文化し整備している大学図書館は少ない」⁵⁾という新藤の指摘にもれず、横浜国立大学附属図書館も、慣例に基づいて選書業務には当たっているものの、具体的な選書の指針となる収書方針があるとはいえない状態である。

2.2.2 電子書籍の購入状況

PDA 実験開始以前の 2015 年 3 月までの電子書籍の購読実績は約 5,400 タイトルであるが、そのほとんどはいわゆるパッケージ契約の形で販売している洋書の電子書籍を購入したもので、このため洋書の割合が全体の 4 分の 3 を占めている。学生にとっては和書の方が需要が高いのではないかとすることは当然推測されるが、電子書籍の購入に当たっては、予算枠が冊子の購読枠と別に存在するわけではないため、年度末の予算消化として買うことが多い。そのため、選書する時間もなく、タイトル単位での選書が不要なパッケージものに偏って購読する傾向にあった。過去には学内の競争的資金を獲得して、シラバス掲載図書などを中心に和書約 170 点を購読した実績もあるが、毎年同規模の選書ができていないわけではない。

そもそも大学図書館の場合、以前から小泉⁶⁾が指摘している通り、教員による選書が多数を占め、図書館員が選書に参加するのは補完的な役割にとどまって来た。そのため当館においても、媒体を問わず選書は図書館員にとって日常的な業務とは言えない状態にある。無論それ以前に、選書の対象となりうる和書の電子書籍の数が、洋書に比して圧倒的に少ないという事情もある。こうした問題も絡み、タイトルごと購読する和書の電子書籍はなかなか増やせない状態が続いてきた。

2.2.3 電子書籍の利用状況と課題

購入済電子書籍の利用状況には、これまでほとんど注意を払ってこなかったが、あまり利用されていなかったことは間違いない。過去に学部 1 年生を中心に図書館サービスに対するヒアリングを実施した際には、紙媒体を好む学生が多数を占めていたということもあり、電子書籍の積極的な利用促進には取り組んでこなかった。しかし、後述するように実験に伴って広報に取り組んだ結果、利用が飛躍的に伸びたことを考えると、利用が伸びないために積極的に選書してこなかったことが、魅力的なタイトルを増やせないことにつながり、それゆえにさらに利用が伸びない、といった悪循環に陥っていたと推測される。

また、最初に述べたように、当館では日本の多くの大学図書館同様、書架の狭隘化という厳しい現実にも迫られている。今後はシラバス掲載図書など、冊子を中心に購読してきた書籍についても、電子書籍を優先して買うように方針転換することも検討する時期に来ていると考えられる。

2.3 千葉大学の状況

2.3.1 蔵書構築と選書方針

千葉大学附属図書館は西千葉、亥鼻、松戸、柏の葉の 4 キャンパスを有する国立大学であり、奉仕対象者数約 18,000 人（2015 年 5 月 1 日現在）、9 学部および多数の大学院、センター等で構成される大規模国立大学の図書館として西千葉地区に本館、亥鼻、松戸地区に各分館を置きサービスを提供している。蔵書冊数は約 140 万冊で、6 : 4 の割合で和書が多い。千葉大学も横浜国立大学同様、書架の狭隘化が進んでいるため、重複図書の除籍を進めており、

蔵書冊数は減少の傾向にある。

選書方針は「千葉大学附属図書館本館選書ワーキング・グループ選定指針」に基づいている。外部には公開していないが、教員や学生が学習資料の推薦をするときの留意事項としてその一部を HP に挙げている。

電子書籍(主にパッケージ型)の選書・受入はすでに 2000 年代から行われていたが、2012 年 6 月「電子ブックの選書方針について」をあらためて検討し、学習において活用できる電子ブックを優先的に収集することを定めた。

選定内容は、①授業で紹介されている資料(シラバス掲載資料、授業資料ナビ⁷⁾掲載資料、Moodle⁸⁾での紹介資料、教員推薦図書等)、②入門的、基本的な資料(基本的な参考文献ブック、学習支援での利用が見込まれる資料等)で、一般教養科目、学部の基礎科目等、学部 1~3 年生を対象とした、多くの利用が想定されるものを優先する。

優先する契約形態は、①買い切りで購入できるもの(継続的な費用負担が生じないもの)、②端末に固定されないもの(iPad 専用)などリーダーを固定しないもの。

その他、①同時アクセス数、②メンテナンス料等、年間維持費の有無、③図書館システムに一括登録可能な形式のメタデータ提供の有無等を留意し、冊子体と電子版のバランスを見ながら選定する。

2.3.2 電子書籍の購入状況

電子書籍の購入に当たっては、2000 年代後半以降、毎年相当額の予算を充て選定・購入している。

2015 年 3 月現在の電子書籍の蔵書数は約 21,000 タイトルであり、和洋の割合は 1:9 で洋書が圧倒的に多い。

千葉大学附属図書館の場合、教員による選書委員会のようなものではなく、附属図書館備付資料の推薦は教員・学生誰でもができる仕組みとなっているが、現状では教員・学生からの電子媒体の資料の推薦は少なく、おのずと図書館職員による選定が主となる。その場合、比較的選定しやすい Springer, Cambridge, Oxford 等の出版社系分野別パッケージが多く選定され、授業で紹介されている資料や入門的・基本的な資料等よく使われる可能性のあるタイトルを個別に選定することは手間と時間を要するため積極的な選定にいたらず、タイトルごとの購入数は残念ながら 2,000 タイトル強に留まっている。

電子書籍に限らず効率的な選書方法の確立は図書館の課題となっており、今回の実験に参加した理由の一つも新たな選書方法の検討に結び付くのではと考えられたからである。

2.3.3 電子書籍の利用状況と課題

2014 年 1 月~12 月に 100 回以上利用された電子書籍は 81 タイトル、50 回以上利用されたのは 303 タイトルで、昨年度のベストリーディング 97 回と比べても遜色がない。しかもこのベストリーディングの図書は本館、分館合せて 16 冊所蔵している。書架の狭隘化という厳しい現実には迫られている状況においては利用が多いからと言って複本を大量に揃えるのは難しい。書架に並ばない電子資料は狭隘化に対する強力な対応策になりえる。ただ、その利点はその

まま目に見えない(書架に並んでいない)という欠点でもある。

電子書籍の利用状況を見ると、購入タイトル数の多い分野(Springer の computer science など)のタイトルは利用回数も多い。それは必要とする電子書籍を実際に利用した経験がある利用者は、「こっちの書籍もあるだろう、あるに違いない」とあらかじめ所蔵を期待している人が多いためではないかと考えられる。はなから「ない」と所蔵を期待しない利用者が検索を試みることもなく、せっかくの所蔵にたどりつけないことと比べ、利用者に「ある」と期待させることは電子書籍を提供する上で重要なことと実感する。

また、2010 年に電子書籍をほぼ全点 OPAC に登録したが、提供される HP (プラットフォーム)からの利用だけでなく、OPAC でのタイトル検索など、様々なアクセスの方法を提供することも利用者に「ある」ことを実感させる方法の一つだと考える。

そして図書館で利用できる電子書籍の存在、「まさかそんなものが図書館にあるなんて…」という利用者を電子書籍に導く最も有効な手段が広報であると考え。今回の実験に当たっての広報活動を後に述べる。

ここで、三大学の現状の比較を表 1 に示す。

表 1 三大学の現状比較

	奉仕対象者数(人)*	蔵書冊数(冊)**	電子書籍タイトル数(冊)**
お茶大	4,933	708,084	20,883
横国大	11,125	1,324,279	5,476
千葉大	17,767	1,391,686	21,372

*2015年5月1日現在

**2015年3月31日現在

3. PDA 実験の概要

3.1 PDA とは

実験の詳細を述べる前に、PDA について簡単に述べる。平たく言えば、選書にあたり、利用者の要求を反映するかたちで購入書籍を決定する方法を指す。広義には購入リクエスト制度や、ILL リクエストのあった資料を購入する方法も PDA の一形態であるが⁹⁾、特に近年注目を集めるようになったのは電子書籍の購入方式として、利用者のニーズを直接的に、そして即時に反映できる点がクローズアップされたためである。先行する米国での PDA 登場の背景、導入後の評価等については、林¹⁰⁾や小山¹¹⁾の報告が詳しい。

PDA のメリットとしては、「実際に使用されたタイトルのみを発注できること、利用者に多くのコンテンツを提示できること、書籍購入費用を抑えることができること、選書にかかる図書館員の負担や時間を削減できること」等が挙げられる¹²⁾。これらのメリットが 2 章で述べたような課題の解決につながる点が、PDA 実験に踏み出す 1 つの契機となった。また PDA は海外での実績は多いが、日本の大学図書館ではまだ事例がないと思われるため、取り組むことそのものにも意義があると考えた。

提供するベンダー側のメリット・デメリットを考えてみると、電子ブックの販路を拡大する中で、いろいろな販売方法を検討するという面では、PDAによる販売促進効果をはかることは一定の意義があるだろう。一方で、後述する通り、電子書籍 PDA の場合にはまずすべてのタイトルをフルテキストアクセスにすることが多いため、効果が不透明な中では出版元や著者との交渉が難航するかもしれないという懸念がある。こうしたメリット・デメリットを考慮しつつ交渉した結果、最終的に丸善（株）の協力を得て、Maruzen eBook Library¹³⁾のプラットフォーム上において、実験に取り組むことになった。

3.2 実験の概要

先行する海外の事例においては、まず無料ですべてのコンテンツへのアクセスを可能にし、その中から、利用者が一定回数あるいは一定時間アクセスしたものを自動的に購入対象とするようなシステムを採用しているところが多い¹⁴⁾。今回実験に参加する三大学の場合は、実験のために割ける予算が限られており、その金額が大学ごとに異なる点を考慮する必要があった。また丸善（株）側も、実験のためだけに PDA 専用プラットフォームを作成するのはコスト的に困難であり、準備が長期化する懸念もあった。そこで、以下のような方法をとることにした。

- 1.) 実験の対象となる電子書籍は、実験の趣旨に賛同した出版社のタイトルのみとし、すべて無料トライアルという形でフルテキストアクセス可能な状態とする。
- 2.) 丸善（株）は実験期間中、定期的にフルテキストアクセスの統計を各大学に送る。
- 3.) 各大学は、月締めで既定のアクセス数に達したタイトルを購入する。これを、各大学で初めに決めた実験のための予算上限に達するまで毎月繰り返す。

なお、すでに各大学が購読済のタイトルは実験対象から外している。期間は 2015 年 4 月から、予算の範囲内で最大で 9 月までとした。この方法により、お互い、今あるインフラを生かして、それほど手間をかけずに実験を始められることになった。

4. PDA 実験の途中経過

4.1 お茶の水女子大学

4.1.1 実験の環境整備・広報

5 月中旬に、実験タイトルの書誌を OPAC および Ochanomizu Search（ディスカバリーサービス）に搭載した。学生への広報は、学部 1 年生の必修授業内で図書館が担当する「情報探索基礎講習」（全 13 クラス。6 月初旬を中心に実施。）において、PDA 実験タイトルを含む電子書籍の利用方法を説明する予定であった。しかしながら、後述するように 5 月末時点で予算の上限を超え、一旦実験を停止することとなったため、授業内での広報は 1 クラスに留まった。

4.1.2 結果と分析

OPAC に未搭載だった 4 月末の時点で、購入済みタイ

トル 1 冊を含む 6 タイトルについて 1 回ずつの利用が確認された。アクセスログによると、まず購入済みタイトルが利用され、その後、同一 IP アドレスから、PDA 実験タイトルが利用されていたことが分かった。

4-5 月を通じて 213 回利用され、利用回数が一定数以上であった 37 タイトルを購入することになった。この時点で予算の上限に達したため、PDA 実験は 6 月 12 日を持って切り上げた。

購入に至ったタイトルの分野は、理系（特に数学と情報科学）のものが圧倒的多数を占めた。IP アドレスの情報から、OPAC 搭載前に偶然このサイトに辿り着いた一部の利用者が、あたかもリアルな書架のブラウジングで見つけた本を試し読みしながら取捨選択するような感覚で繰り返し利用していたことが確認された。このような利用行動は、買い切りやパッケージ契約の電子書籍、通常の図書の閲覧においては全く問題ないが、PDA においては、利用回数が一定数に達した時点で自動的に購入することが決まるため、より多くの利用者による幅広い分野の利用から購読タイトルを選びたい場合には課題になってしまいうことが分かった。また、ダウンロードの結果が肯定的評価でも否定的評価でも、一定数に達することで購入対象となってしまう。回数のみを選定基準とすることの危うさも感じられた。

なお、利用回数が一定数を超えなかったタイトルは 5 月末時点では 31 タイトルだったが、6 月 12 日のログまでチェックすると、161 タイトルまで伸びている。これらは人文科学、教育科学、英語多読用図書、食物科学などバラエティに富んでおり、今後の購入候補と見なすことができそうであった。

4.2 横浜国立大学

4.2.1 実験の環境整備・広報

発見可能性を上げるため、無料トライアル対象となったすべてのタイトルについて、OPAC に簡易書誌データを登録した。さらに図書館ウェブページのトップに掲載するニュース一覧にトライアル情報を掲載し、利用の多かったタイトルについては図書館で購入し、トライアル終了後も継続して利用できるようになる予定であることを案内した。

以上がウェブ上での広報活動であるが、ここまでは、通常の方法で電子書籍を購読した際の広報とさほど変わりはない。電子書籍の広報に際しては、ウェブの世界で完結させず、来館利用者に対してリアルな世界で広報するのが効果的であるという指摘があるため、実際はこちらに重点を置いた。具体的には、館内掲示用のポスター、配布用チラシ、書架用のポップ、さらにデジタルサイネージ用のスライドショーや画像を作成し設置した（図 1、図 2）。スマートフォンでの利用を想定し、QR コードからのアクセスや、学認（GakuNin）を通してアクセスする方法、ダウンロードしてスマホアプリで読む方法等についても案内するように留意した。なお、実験の対象タイトルであるか否かにはこだわらず、すでに購入済のタイトルも合わせて広報の対



図 1 書架用ポップ



図 2 電子書籍広報の様子

象にすることにした。

4.2.2 結果と分析

スタート前は、実験の期限である 9 月末までに予算上限に達するところまで利用数が伸びないのではないかとという懸念があったが、いざ始まってみると急激にアクセス数が伸びて、2014 年 1 年分のアクセス数を 2015 年 4 月の最初の週だけで上回るほどの勢いであった。結果、丸善（株）と取り決めた期間分の最初の統計を送ってもらった段階で、39 タイトルを購読することになった。数が少なく期間も短いため、この 39 タイトルの内容だけで選ばれた書籍の傾向を語るのには難しいが、就職活動用のハウツー本や、アプリケーションの解説本などが多く、これらは普段の図書館員による選書ではあまり選書していないものであった。利用者のニーズに応える PDA ならではの選書結果になったと言えるかもしれない。

4.3 千葉大学

4.3.1 実験の環境整備・広報

より多くの利用者にこの実験に参加して電子書籍を知ってもらうため、附属図書館 HP で広報するとともに、新刊に興味を持つ利用者の多い「新着図書コーナー」の隣に電

子書籍利用促進コーナーを設置した。電子書籍は実物がないので、ポスターなどで利用方法やメリットを強調し、役立つ電子書籍（レポートや卒論の書き方、理系の基礎的な解説書など）の紹介や今回の実験対象のブックリストを置いた。

- ・プロバイダーによっては、自宅のパソコン・タブレット端末からでも利用でき、24 時間いつでも利用可能。
- ・鞆に重い本を入れたり、持ち運びの手間がない。
- ・図書館では多くが貸出不可の事典や辞書も利用可能。
- ・千葉大の蔵書検索（OPAC）の画面から検索でき、リンクをたどって、そのまま本文まで閲覧が可能。
- ・本文内の全文検索も可能。

図 3 電子書籍のメリット

また、その場で電子書籍の検索や閲覧が体験できるように、タブレット端末（iPad）とノート PC 各 1 台をコーナーに設置した。



図 4 電子書籍利用促進コーナー

4.3.2 結果の分析

実験を開始して 2 ヶ月（原稿執筆時点）が経過した。丸善（株）から提供される電子書籍の利用回数は、1 月～3 月は 19 回～27 回と極めて少なかったが、実験を開始した 4 月には 190 回、5 月には 457 回と大幅な増加が見られた。これは広報の賜物とも言えるが、利用可能タイトルが購入済の 900 タイトルから実験対象タイトルを加えた 4,500 タイトルに増えたことも理由の一つと推測される。2 章でも述べたが利用者に「ある」と期待させることは電子書籍を提供する上で重要なことと実感する。

実験対象タイトル中 2 ヶ月間に 1 回以上利用されたタイトルは 345 タイトルで、そのうち購入したのは 4 月が 8 タイトル、5 月が 24 タイトルであった。4 月に購入した 8 タイトル全てが 5 月にも利用され、半数のタイトルは 4 月の利用回数を上回っており、6 月も順調に利用を伸ばしている。

購入した 32 タイトルの分野は理工学が 21 タイトルと最も多かったが人文科学、社会科学、生命科学、医学、農学と全ての分野でまんべんなく利用されていた。学外から学

認を経由した利用も2割ほどあり、その中には深夜や早朝の利用もあった。

5. PDAのメリットと課題

2章で述べたとおり、三大学の規模や状況はそれぞれに異なっている。それに伴い、4章のとおり、PDA実験の結果にも違いがみられた。一方、共通の利点と課題も見られたので、本章でまとめる。

5.1 PDAのメリット

今回の実験で得られた、電子書籍のPDAならではの利点を2点挙げたい。

1点目は、先行文献でも述べられている通り、「利用という形で表れた情報要求を図書館が把握し、コレクション構築に生かすためのしくみ」¹¹⁾であることが改めて確認できた点である。まだスタートして2ヶ月ではあるが、購入に至ったタイトルの眺めると、図書館職員が意図しない需要の掘り起こし、情報要求の顕在化を実現できたことがわかる。紙の書籍の選書の時代には難しかったこの点が、電子書籍で簡単に実現できたことを踏まえると、PDAは有効な選書方法であるといえる。

2点目は、購入済タイトルの利用回数も含めて、電子書籍へのアクセス数が大幅に増えたという点である。PDAのもう1つの利点である、発見可能性・入手機会の増加が、電子書籍の利用促進の一助となっていると考えられる。この点は図書館や利用者のみならず、電子書籍の提供側にとっても大きな利点であろうことを強調しておきたい。

5.2 PDAの課題

PDAによる選書の有効性は確認できたが、一方で課題も見えてきた。特に三大学で共通して課題だと認識されたのは、アクセス回数と購読決定との関係である。購読決定に至るアクセス回数の設定が妥当であったのかどうか、同じ回数のアクセスであっても、同一IPからかそうでないかを考慮する必要があるのか、アクセス時間など他の要素も考慮に入れるべきではないか、といった点、あるいはそもそも、ダウンロードした結果、必要性の有無はどうだったのかを考慮されないといった点は、継続して検討すべき課題である。購読決定の条件については、提供者側と図書館側の両者が納得できる適切な条件の設定が必要だということが改めて確認できた。

このような課題の背景には、電子書籍の値付け方法の問題がある。和洋や分野、出版者により違いはあるが、今回実験対象としたタイトルはおおむね電子版が冊子版の2-3倍程度（1ユーザ価格を三大学で抽出調査した結果）の価格であった。2章でも述べているとおり、書架の狭隘化の問題もあり、電子書籍に対する図書館側の注目度は高まりつつあるが、現在の購読モデルにおいては、費用対効果を鑑みて、購入には慎重にならざるを得ない部分もある。

今回の実験で電子書籍への一定量のアクセス数を確保できたことで、その結果を分析し、電子書籍の学外からの利

用動向や、内容・分野による使われやすさなどの利用者行動の概要をつかむ素地はできた。しかし、小山がすでに指摘している通り、これらの動向をもとに選書のあり方、ひいては蔵書構成を考えるのはあくまで図書館員の仕事である¹¹⁾。今回の実験の結果をどう活かすかが問われている。

6. おわりに

再三述べているとおり、本稿執筆中の2015年6月時点では実験は途中段階である。本来ならば実験終了後に5章で述べたPDAのメリット・デメリットを考慮した上で今後の展開まで含めて執筆したかったところである。しかしながら、三大学の悩みは、多くの大学図書館にも共通する悩みであると推測されることから、早い段階で情報を共有することに意味があると考え、途中経過を報告することとした。

PDAは一つの有効な手段であり、新たなビジネスモデルの構築を進めることで、国内における日本語の電子書籍の導入が進むことが期待される。その結果として、電子書籍を含めた選書の未来をどのように変えていくか、ひいては大学における学びのスタイルの変革をどう喚起していくか、という視点こそが重要であると考えている。今後とも三大学連携プロジェクトの動向にご注目いただければ幸いである。

註・参考文献

(※URLの参照日はすべて2015-07-15)

- 1) 横国大・千葉大・お茶大 3 学長が図書館連携の申合せ。文芸速報。vol.7994, 2014, p.5.
- 2) 千葉大・お茶大・横国大三大学図書館連携 Facebook ページ <https://www.facebook.com/coybrary>
- 3) 横浜国立大学. 役員・教職員数・学生数. <http://www.ynu.ac.jp/about/ynu/persons/index.html>
- 4) 横浜国立大学附属図書館. 図書館概要. <http://www.lib.ynu.ac.jp/about/gaiyou.html>
- 5) 新藤豊久. 女子美術大学図書館における収書方針と選書方針. 大学図書館研究. vol.80, 2007, p.20-32.
- 6) 小泉公乃. 蔵書評価法からみた図書館員と教員の選書: 慶應義塾大学三田メディアセンターの事例分析. Library and information science. vol.63, 2010, p.41-59.
- 7) 教員と図書館職員が協働で作成する授業単位のパスファインダー
- 8) 千葉大学が利用している Learning Management System
- 9) 村西明日香. ILL をきっかけとした Patron-Driven Acquisition: パデュー大学図書館における収書方針と選書方針. 中部図書館情報学会誌. vol.53, 2013, p.61-71.
- 10) 林豊. E1310 大学図書館に広がる電子書籍の Patron-Driven Acquisitions. カレントアウェアネス-E. no.218, 2012. <http://current.ndl.go.jp/e1310>
- 11) 小山憲司. 利用者要求にもとづくコレクション構築: 大学図書館における電子書籍を対象とした PDA を中心に. カレントアウェアネス. vol.313, 2012, p.18-21. <http://current.ndl.go.jp/ca1777>
- 12) Patron-Driven Acquisition: 利用者主導の選書方法. USACO news. vol.212, 2010. http://www.usaco.co.jp/itemview/template44_3_1740.html
- 13) Maruzen eBook Library. http://kw.maruzen.co.jp/ln/eb/eb1_01.html
- 14) 小山憲司. 大学図書館における電子書籍とコレクション構築 (特集 平成 26 年度日本薬学図書館協議会研究集会). 薬学図書館. 2015, vol.60, no.1, p.14-20.

Special feature: The current state of collection development. PDA's impact for the future of selection. TATEISHI Akiko^{*1}, ETORI Naoko^{*2}, SHOJI Michiko^{*3} (*¹Yokohama National University Library and Information Department, *²Ochanomizu University Library and Information Division, *³Chiba University Library Scholarly Information Division, 79-6 Tokiwadai, Hodogayaku, Yokohama 240-8501 JAPAN)

Abstract: This paper reports on the E-book PDA(Patron-Driven Acquisitions) Experiment, a programs of the Three Universities Cooperation Project, organized by Chiba University, Ochanomizu University, and Yokohama National University. This experiment lasts from April to September 2015. These universities differ from one another in terms of book selection policies, status of e-book collection, and problems of collection development. Meanwhile, they have a common challenge to select and acquire a bigger number of Japanese e-books. With the cooperation of a prominent book company, in the PDA experiment, the students at the three universities were able to sample many e-books. At the end of May 2015, the users' potential needs and the effect on promotion of utilization were observed. At the same time, the study indicated that more consideration is required to set adequate purchasing terms between venders and librarians.

Keywords: e-book / Patron-Driven Acquisitions / book selection / university cooperation / collection development / public relations